

北海道で！縄文を知る

第8回

：縄文世界遺産(かつてにフットパス)  
 鷲ノ木遺跡で！ かつてにフットパス



本文⑳-㉑間：鷲ノ木町にて(カーブミラーで自撮り)

小杉 康 (こすぎ やすし)

北海道大学大学院文学院考古学研究室教授  
 埋蔵文化財調査センター長

1959年埼玉県生まれ。明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学(考古学専攻)。日本学術振興会特別研究員、国立歴史民俗博物館外来研究員、明治大学文学部助手を経て、現職。主要著書に『縄文のまつりと暮らし』(岩波書店)、『縄文時代の考古学』全12巻(共編著、同成社)、『はじめて学ぶ考古学』(共編著、有斐閣)、『道の考古学』(北海道大学考古学研究室研究紀要、第2号)など。日本考古学協会会員、北海道考古学会会員。

世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」は17の遺跡で構成されています。そのうち北海道には6遺跡があります。その他に「関連資産」とされた遺跡が北海道と青森県に1つずつあります。そのうちの1つが、今回歩く鷲ノ木遺跡(森町)です。しかし、世界遺産の本家本元であるユネスコの紹介文の中には、関連資産という名称も鷲ノ木遺跡の名前もでてきません。これはいったいどういうことでしょうか。

登録までの長い道のり

2009年、はじめに「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」として「世界遺産暫定一覧表」に記載が決定された際は15遺跡(北海道4遺跡)でした。この時は鷲ノ木遺跡も構成資産候補として含まれていました。ここから2021年7月に正式に登録されるまでの10

年をこえる長い道のりが始まります。まず、2012年にはキウス周堤墓群(千歳市)・垣ノ島遺跡(函館市)・大森勝山遺跡(弘前市)の3遺跡が追加され、18遺跡が構成資産となりました。その後、文化庁は縄文遺跡群関係自治体の準備状況や課題を踏まえ、ユネスコへの推薦がまだ整っていないと判断し、国としての世界文化遺産推薦候補への決定が数年にわたって見送られることとなります。そんな中で、2015年には鷲ノ木遺跡と長七谷地貝塚(八戸市)が構成資産から外され、都合16遺跡となります(後に入江・高砂貝塚を2つとして数えて17遺跡に)。なぜ、鷲ノ木遺跡が外されたのでしょうか。

鷲ノ木5遺跡の発見

鷲ノ木遺跡は、2003年、北海道縦貫自動車道、森おとしべ落部間の敷設工事の際に発見されました。当時は「鷲ノ木5遺跡」と呼ばれていました。鷲ノ木地区の5番目の遺跡の意味です。鷲ノ木4遺跡は高速道路の敷設に先立つ所在確認調査で発見されていたので、工事の日程に支障をきたさないように本発掘調査が実施されました。そんな中で道路敷設予定範囲内に新たな遺跡が見つかります。1640(寛永17)年に噴火した駒ヶ岳の火山灰(軽石層:Ko-d層と呼称)に厚く覆われて(約1m)、縄文の当時の姿を真空パックしたかのような良好な遺存状態で、直径約40m弱のストーンサークル(環状列石)が顔を出したのです。鷲ノ木5遺跡(後に鷲ノ木遺跡に改称)です。もはや遺跡を避けて迂回させるコース変更もできない距離まで、高速道路の工事は遺跡の両側から迫っていました。勾配がきつくなってしまうので、トンネルで遺跡の下をくぐらせることもできません。

鷲ノ木5遺跡の重要性は誰の目にも明らかでしたが、ここまで工事が進んでしまえば、遺跡を現状保存することは難しい。そこで北海道考古学会が動き出します。地元の方々の理解を得ながら、全国組織である日本考古学協会とも連携して、日本道路公団や国へと遺跡(ストーンサークル)の現状保存を求める活動の展開です。もはや通常のトンネル工法では対応できません。発掘されたストーンサークルの石を微動もさ

せることなく、かつその直下に1mほどの土を残したまま、トンネルを掘削する特殊工法（非開削によるR&C工法）ならば可能のようです。その際の工費の総額は100億円がかかると当初はささやかれました。特殊工法の適用範囲をぎりぎりストーンサークルの規模にまで縮めたり、北海道と道路公団の連携によって関連道路工事の経費を軽減化したりする方策がとられ、経費を20～30億円までに圧縮できる見通しのもと、ストーンサークルの現状保存と高速道路の敷設とを両立することができました。

現在、北海道縦貫自動車道を函館方面に向かい、落部IC（インターチェンジ）を過ぎ、森ICにさしかかる手前で「鷺ノ木遺跡トンネル」をくぐります。トンネルの天井面から地表面までの間は1mほどです。トンネルの入り口には「鷺ノ木遺跡・ストーンサークル」の表示が掲げられています。「えっ、ホントにこの上にストーンサークルがあるの？」といった目を疑いたくなるような光景です。なかなか国からのユネスコへの推薦を勝ち取れない「縄文遺跡群世界遺産登録推進本部」は構成資産の見直しを行う中で、このような遺跡の景観は自らマイナスと判断したのでしょう。

## ダムとトンネル

1972年、世界遺産条約が成立するきっかけとなったのが、ナイル川にアスワン・ハイ・ダム（現ナセル湖）を建設することによって水没してしまうエジプト新王国時代のアブシンベル神殿（ヌビア遺跡）を救出するプロジェクトでした。国際的な協力体制のもと、神殿はいくつものパーツに切り分けられて60mほど上方に移築されました。それが可能になったのは石造の作りだったからです。ナセル湖のほとりにたたずむアブシンベル神殿を含むヌビア遺跡群は1979年に世界遺産として登録されました。

縄文のストーンサークルは環状列石といっても、地面に立てられた大きくても1mに満たない楕円礫の集合体です。それを現状保存するためには、大地と切り離すことはできません。そのままの位置で、現状保存を可能にした鷺ノ木遺跡での今回の対応と、その創り出された景観こそは、約3千数百年前の人たちがモ

ニュメントとしてのストーンサークルに込めた思いと、それを史跡として未来に残そうとした現代の私たちの決断と、それを可能にした現代の最高水準の土木技術との結晶なのです。50年後、100年後の人たちは、鷺ノ木ストーンサークルと鷺ノ木遺跡トンネルとが醸し出す景観をどのように評価してくれるのでしょうか。

## ストーンサークルとは

ストーンサークルと聞いて最初に思い浮かぶのは、やはりイギリスのストーン・ヘンジでしょうか。4～5mにも及ぶ石柱を立て、また門状に組み立てた、円環状をなす巨大な石造建造物です。さらにその外側には同心円状に土塁と堀がめぐらされ、全体で直径100mにも達します。その目的や機能は未だ完全には解明されていませんが、天体の運行と関連した祭祀や墓所、聖地などの役割をはたした構造物と考えられています。列石部分は約4500年前の新石器文化の農耕民が造り始め、数百年にわたって補強・改築されながら維持されました。また土塁などの成立年代はさらに古くまで遡るようです。

縄文文化のストーンサークルは、成人の膝から腰の高さくらいの楕円形の河原石を立てて（立石）、全体で直径数十m規模の環状に配置した構築物です。縄文前期から登場しますが、北東北から北海道にかけては2つの系統のストーンサークルが縄文後期の前半に盛行します。おおよそ北東北の南半部の系統は立石の下に土坑墓（遺体が埋葬された墓穴）があるタイプ（墓地系）です。北東北の北半部から北海道にかけての系統は、墓地は隣接して造られ、立石だけが円環状に並ぶその内側では葬送儀礼などが執行されたと想定されています（斎場系）。どちらも特定の地域社会の葬送と結びついた構築物ですが、全体構成や石の配置方法、規模の類似性の高さから、地域集団間を結びつける役割もあったことが考えられます。鷺ノ木ストーンサークルは斎場系です。なお、鷺ノ木遺跡の詳しい説明は本誌NO.690の高橋毅さんの「史跡鷺ノ木遺跡」をお読みください。

かつてにフットパス

では、第4回目の〈かつてにフットパス〉に出かけましょう。今回のコースは、スタート地点を渡島沼尻駅①にします。駒ヶ岳の裾野の海岸線をたどって、これまで歩いてきた第2回・第3回のコースを内浦湾(噴火湾)越しに右手遠方に眺めながら鷲ノ木遺跡②に向かいます。歩行距離は約25km、全ルートが森町域内です。国土地理院地図『砂原』『渡島森』1/25000の地形図を使います。砂原町は2005年に森町と合併し、現在は「砂原東3丁目」などの字名に残っています。

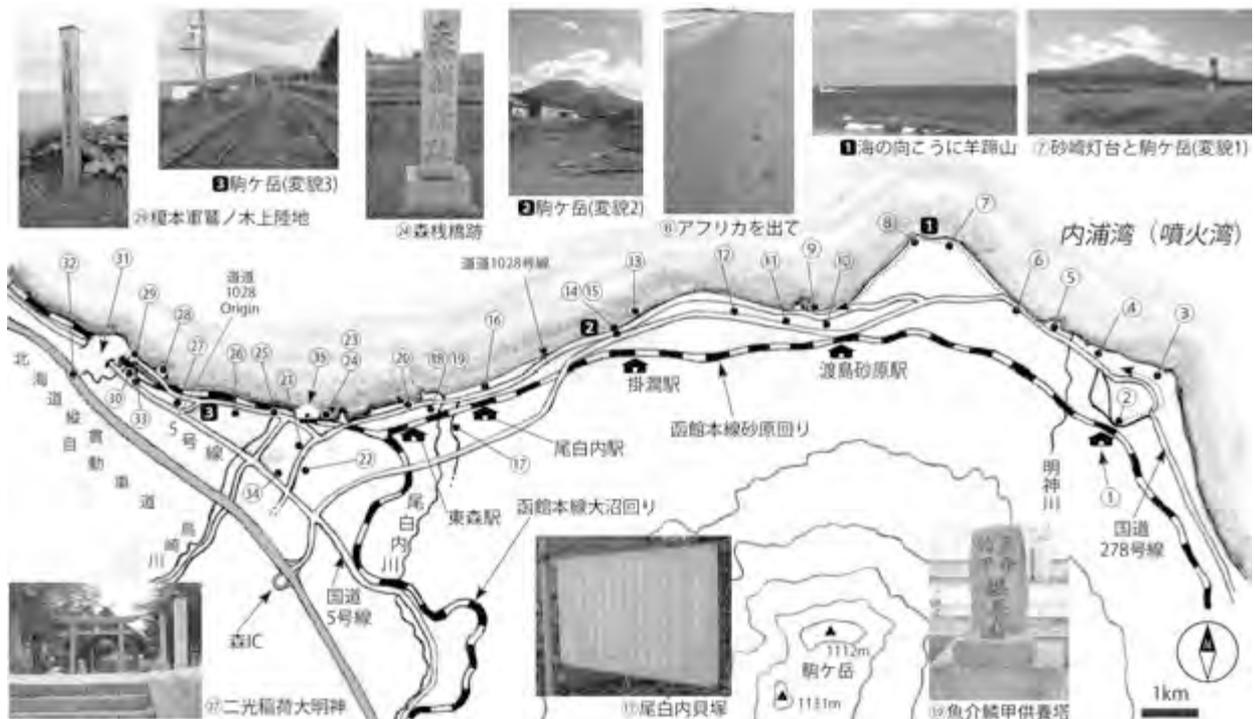
：《駒ヶ岳北麓砂原海岸のみち》コース

函館本線は森駅を過ぎると、駒ヶ岳の西側(大沼回り)と、北-東側(砂原回り)とを走る路線に分かれます。砂原回りで森駅から5つ目が渡島沼尻駅です。駅を出るとすぐに真っ赤な鳥居と社のニツ山朝日神社・開拓会館②があります(「沼尻開拓稲荷神社」の別名があるので、ご祭神は宇迦之御魂神でしょうか)。道は3本に分かれていますが、右側の道を進み、駒ヶ岳を背にして松屋崎方面に向かいます。駒ヶ岳は1640年の噴火の際に山体崩壊をおこします。山頂中央部が鞍状に大きく崩れたことによって、二峰を頂く現在の山容となりました。山の南側に流れ下った土砂によって河川が遮られ、今日の大沼、小沼の湖ができます。湖中に浮かぶ小さな島々が、有珠山のところでお話し

した「流山」に相当します。山の北側を下った土砂は海へと流れ込んで津波を発生させ、多くの犠牲者を出したことが記録されています。前々号で紹介した有珠6遺跡の周辺でも、この津波で打ち上げられた砂層を観察することができます。

道路の両側には駒ヶ岳山麓の緩やかな起伏から続く農場の緑が広がっています。0.7kmほど直進すると函館市街地から亀田半島の海岸線を回って森町に至る国道278号線にぶつかります。そこを左折して松屋崎から砂原漁港へ向かいます。道南には幕末から箱館戦争の当時に作られた陣屋と台場が多く残されています。道南にある陣屋は、幕府が北辺警備のために諸藩に命じて設置させた建物(施設)です。台場は箱館戦争の際に旧幕府軍が設置した土塁や砲台をとともう要塞です。進行方向の右手の草むらの先には松屋崎台場跡③があるはずですが、場所を確認することはできませんでした。左折してから1.7kmほどで沼尻漁港⑤です。途中、道路の右側に縄文中期・後期のニツ山遺跡④がありますが、これも確認できませんでした。

北半球の中緯度地帯に位置する日本列島では、上空で強く流れている偏西風のために、火山灰や軽石は北東に向かって広がってゆきます。この周辺は方角に関係なく火山噴出物が厚く堆積していますが、いずれにせよそのために縄文の遺跡は存在してもその下に埋もれてしまっています。ニツ山遺跡は未だ内容があまり



よくわかっていませんが、重要な存在です。

しばらく進み、「函館から100km」のキロポスト⑥を過ぎたところで国道278号を離れて、海岸づたいに砂崎灯台⑦を目指します。しばらくコンクリート護岸とクロマツやカシワの植樹による土砂防止林が続きますが、やがて海岸砂丘地帯へと移ります。その先端の砂崎灯台を回り、内浦湾越しに霞む羊蹄山、有珠山を見ながら（ビューポイント■）、遊歩道ではなく海岸を進みます。砂浜には汀線<sup>ていせん</sup>に沿って犬を連れて散歩をする人の足跡、それと直交するように無数のカモメの足跡⑧が汀線から内陸側に向かって、またその逆向きに残されています。左手には駒ヶ岳がここでは神奈備形に見えます。アフリカのタンザニア、サディマン火山から約20km離れたラエトリ遺跡では、360万年前の地層から数人分の初期人類と多くの動物との足跡化石が発見されています。今日、直立二足歩行の成立をもって人類の誕生（約700万年前）と考えられています。ラエトリはその完全な証拠です（拙著「道の考古学」参照）。以来、人類は地球上の各地へと歩いて拡散してゆきました。その最新の足跡がそこにある、と言ったら少し感傷的過ぎるでしょうか。

砂原漁港⑨の手前で道道1028号線に入り、高台にある砂原稻荷神社⑩にお参りし、国指定史跡の砂原陣屋跡⑪に到着。正式には「南部藩室蘭陣屋<sup>ぶんたん</sup>の分屯所」です。現在は、一辺50mほどの方形に回る高さ1mほどの土塁が残されています。国道沿いの道の駅「つど〜るプラザさわら」⑫で「帆立めし」をゲット、道道に戻り、掛澗漁港<sup>かかりま</sup>⑬・掛澗稻荷神社⑭に至ります。神社の向かいには立派な「馬頭観世音」石碑⑮があります。「掛澗」とは和名に由来し、「船かかり（停泊）の入江」の意味だとか。駒ヶ岳は頂上の右側にサイの角を突き出した山容に変化しています（ビューポイント■）。

### ：《鷺ノ木ストーンサークルへのみち》コース

尾白内町に入ると、またもや尾白内稻荷神社⑯です。すこし進んで左折すると、現海岸線から650mほど離れた段丘の端に、続縄文期最古の尾白内式土器の標識遺跡である尾白内貝塚⑰に到着。今はパークゴルフ場になっていました。道道1028号線に戻ってさらに西へ、

尾白内川を越えて、いよいよ森町の市街地に入ってゆきます。港町の海神社<sup>うみ</sup>⑱があり、境内には「魚介鱗甲<sup>ぎょかいりんこう</sup>供養塔<sup>くようとう</sup>」⑲が祀られています。「ニチレイフーズ森工場」の入り口には「日本冷凍食品事業発祥の地碑」⑳が建立され、隣には町指定有形文化財の「冷凍機器」が展示されています。1028号線は函館本線を越えます。森町役場のところが縄文中期の集落遺跡である御幸町遺跡<sup>みゆきちょう</sup>㉑、向かいの「青葉ヶ丘公園」は北海道指定天然記念物「茅部<sup>かやべ</sup>の栗林」㉒です。町名の由来でもあるアイヌ語の「オニウシ」（樹木の多くある所）の面影が残されています。栗の実は縄文人にとっての最重要な食料源の一つでしたが、北海道には元来栗は自生していませんでした。道南の栗林は縄文前期の終わりころ以降に縄文人が運び入れた栗の子孫たちのようです。森駅に戻ると、線路越しに海中に「明治天皇御上陸記念碑」㉓が見えますが、そこが森<sup>さんばし</sup>棧橋跡㉔です。全長255mの棧橋の脚材には多くの茅部栗の用材が使われていました。明治年間、英国の女流探検家イザベラ・バードはここから海路で室蘭に渡りました。

先を急ぎましょう。森駅を過ぎ、鳥崎川に架かる橋を渡ります。遡上する多くの鮭の魚影が鳥崎橋㉕から見えました。1028号線は函館本線と並走します。鳥崎稻荷神社㉖を過ぎ、国道5号線と交わる1028号線の起点（Origin）の少し手前を右折して町道に入ります。ここから望む駒ヶ岳は二峰を頂く山容へと変貌しています（ビューポイント■）。富士見町の二光<sup>にこう</sup>稻荷大明神㉗、鷺ノ木町の鷺ノ木漁港㉘、榎本軍鷺ノ木上陸地（鷺ノ木史跡公園）㉙、鷺ノ木稻荷神社㉚（海沿いなのになんと稻荷神社がこんなに多いのでしょうか）を過ぎ、湯の先トンネル㉛の手前で国道5号線を渡り、砂利道を1kmたらず進むと、現在史跡整備中の鷺ノ木遺跡（ストーンサークル）・鷺ノ木遺跡トンネル㉜に到着です。

帰途は、時間に余裕があれば国道5号線沿いに函館方面に歩き、道の駅「You・遊・もり」㉝に立ち寄ってから、森駅㉞を終点とするのもいいでしょう。疲れてしまった方は、国道5号線に戻り、函館バスの停留所「史跡公園前」㉞で乗車して、「森駅前」で下車する方法もあります。

（情報：歩行日2022.9.22）